

「地域映像アーカイブ」プロジェクトの目的と射程

新潟大学人文学部 准教授 北村 順生

1. はじめに

このたびの展覧・上映イベント「地域映像の力—新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」は、新潟大学人文学部と新潟大学人文社会・教育科学系研究プロジェクト「地域文化に関するコミユナルな映像アーカイブ情報の構築と情報発信」のもとに開催される。このイベントでは、「地域映像アーカイブ」プロジェクトの成果の一端を紹介するとともに、この活動に対する多くの方々の理解と協力を求めることを目的としている。ここで、我々の進めているプロジェクトの目的やその射程について簡単に紹介したい。

2. プロジェクトの背景と問題意識

まず、「地域映像アーカイブ」プロジェクトの背景として、大きく三つの問題意識からスタートしている。

第一に、現在流通している映像情報の地域的な偏在の問題だ。現代の日常生活の中で、われわれはテレビや映画をはじめとして大量の映像と接しながら生活している。しかしながら、テレビ局の系列関係や映像制作集団の大都市への偏りなど、中央一極集中型の社会構造の中では、情報の制作や発信、流通における中央と地方との間の格差は非常に大きい。こうした状況の中では、目にする映像の多くは、必然的に東京を頂点とした大都市についての映像が多くなる。たとえば、地域の社会や文化が映像の対象として取り上げられることがあっても、それは大都市の視点から描かれた紋切り型の地域の姿であり、地域で暮らす人々が感じている地域の自己像との間で齟齬をきたす場合も多い。地域の視点から作られた地域に関する映像が、地域自身の手で発信されるような場面は非常に限られているといえる。その結果、地域社会の姿として忘れ去れてしまっているものも多いのである。

第二の問題は、地域の映像に関する交流回路の欠如だ。近年のビデオカメラなどの撮影機器の急速な普及により、地域における日常生活の一端を映像情報として撮影、記録する機会は飛躍的に増えている。しかし、こうして生み出された映像コンテンツは、家族やせいぜいが身近な

友人の間で消費することを前提に作られたものが多い。地域における映像表現の一部として、社会的に共有していくような情報回路を欠いているため、地域文化の情報発信へと結びつかずにいる。そのため、撮影する側もそのような社会性を帯びた表現活動に向けての意識はきわめて薄い。しかし、もともとはごく個人的な意図で撮影、保存された映像が、異なる文脈の中では、地域や他者との結びつきの中で、記録と記憶を共有する手段として重要な価値をもってくる可能性はありうる。そのためにも、地域の映像を交流していく場の存在が必要となってくる。

第三に、公開される地域の映像情報の分断の問題だ。ブログやSNSの普及により、地域に関連した映像情報がさまざまな形態により公開されるケースも徐々に増えつつある。しかしそれらの映像コンテンツは、個々の映像が分断され断片化された状態で公開されており、たとえば新潟という地域文化に関する映像情報を俯瞰し、全体像を把握することが難しい状況にある。ある文脈で発信された別々の映像情報が、また別の文脈の中に置き換えられ並置された時に、新たな別の価値を生み出すことは多い。そのような映像と映像との間のつながりや関係性を生み出すためには、個々の断片的な映像情報を整理し、ネットワーク化していくような活動が必要となる。

3. プロジェクトの計画

以上のような問題意識のもとに、「地域映像アーカイブ」プロジェクトでは、にいがたという地域の中で大きく次の三つの分野において実践的な活動を行っていくことを計画している。

第一が、地域文化に関する映像アーカイブ情報を再構築していく活動である。その中には、既存の新潟の地域文化に関する映像資料について、調査、発掘、保全していくことが含まれる。しかしながら、地域文化に関わる映像資料に関する情報は大量かつ多様であり、とても一つの機関やプロジェクトとしてアーカイブの構築を完結できるものではない。そこで、地域の映像情報を収集しているさまざまな機関や個人と連携しながら、緩やかなネットワークをつくり、それらの映像資料の所蔵情報のデータベース化を進め、全体として新潟の地域文化に関する映像情報がアーカイブされ、活用されていくようにしたい。

第二に、現在はまだ資料化されていない地域文化に事象について、映像資料として記録し保存していく活動を行っていきたい。市町村の広域合併による地域文化の組織的支援の減少や、高齢化による戦前世代の減少など、地域の文化的資源を記録し保存していくことは危急の課題となっている。中央の視点から見た地域文化ではなく、地域の生活者の視線に基づいた地域文化のありようを映像化していく必要がある。その際にも、関連した活動を行っている団体や個人と連携し、協働することによって作業を進めていくことが求められる。

第三に、地域文化に関する映像交流の場の構築である。既存の映像資料を調査、発掘するにせよ、現在の地域文化を撮影、記録するにせよ、その成果を単に保存、保全しているだけでは地域にとって十分とはいえない。発掘や記録の結果生まれた映像資料について、それぞれの資料の性格に応じてもっとも適した形で、地域住民や地域外の関係者へと公開し、交流していく仕組み作りが重要となる。制度的あるいは技術的な検討の上で、それぞれの映像情報が適切な形で社会に開かれ、それらの映像を通じて新たな地域文化の再生産が行われるような回路をデザインしていく。

以上のような三つの実践的活動を行うことにより、地域社会で共有された、公共財としてのコミユナルな地域文化に関する映像アーカイブのモデルを構築していくことをプロジェクトでは目的としている。

4. 地域と地域を結ぶアーカイブのネットワーク

これまで述べてきた「地域映像アーカイブ」プロジェクトは、にいがたという地域の中で映像アーカイブの構築と活用を探ることを目的としている。しかし、同じような地域の映像アーカイブは、当然、全国のさまざまな地域社会において構想されうるものであるし、海外の地域コミュニティにおいても検討されるべきものである。既に、その先行的な活動事例も報告されてきている。

将来的に、このような地域のアーカイブ同士が相互に連携し、ネットワークを組んでいくことの意義は大きい。地域の映像表現が決して一極集中的な視点に囚われることなく、地域の生き生きした表現を取り交わすことで、われわれの見る世界感は大きく変わってくるに違いない。

地域映像アーカイブが取り扱う多くの映像表現は、地域生活の中で人々が地域の文化を映像として記録し表現しようという営みであり、鶴見俊輔が地域の日常的な生活と芸術との接点に位置するものとして名付けた「限界

芸術」の範疇に入るものであろう。現在、広く流通している映像表現の多くは、地域を眼差す画一的な視点や様式に枠付けられてしまっている。こうした状況の中で、地域映像アーカイブの構築は、われわれが持つ地域への視線や表現のあり方をあらためて問い直し、新しい地域文化を創造していく糧となることであろう。





高橋 捨松・写